

近畿地方における絶滅危惧植物の 現状に関する研究

近畿レッドデータブック研究会
代表 栗 林 実

はじめに

1989年末に「我が国における保護上重要な植物種の現状（通称、レッドデータブック）」が出版されたのを契機に、絶滅が危ぶまれる植物の保護についての社会的関心が急速にたかまった。同書に収録された、日本から姿を消すおそれのある種の保護については、開発にともなうアセスメントにおいて当該種の存否がかならず問題にされるなど、行政的にも一定の配慮がなされるようになってきた。

しかし一部では逆に、同書に記載のない植物は一顧だにされないという状況をもまねくことになった。同書はあくまで全国レベルで保護上重要な種を記載したものだから、地方レベルの植物の保護を考えるうえで、全国版だけを尺度にするのは、はなはだ都合がわるい。現に近畿地方では、全国版に収録されていない植物のなかに、収録種以上に深刻な事態に直面している種類がすくなくない。

たとえば、東北、北海道からアジア大陸にかけてはふつうにあるが、近畿ではきわめてかぎられたところにだけ生存している植物がある。これらの遺存植物は、地球の歴史の変遷の記録として重要である。こうした種類にたいして保護上有効なでだてがうてなければ、近畿地方の植物相の特徴を喪失させることになるだろう。

本研究はこうした情勢をふまえ、近畿地方における保護上重要な植物の現状をできるかぎり詳細にとらえ、保護対策を検討するための基礎資料をえることを目的としている。

研究項目

本研究の項目は以下の4点である。

- 1) 近畿地方における保護上重要な植物候補のリストアップ
- 2) リストした植物の府県別分布現状の把握
- 3) リストした植物の生育環境の類型化と減少要因の検討
- 4) 保護上重要な植物の選定と保護対策の検討

1991年6月22日に第1回の研究会をもって以来、今日までに15回の討議をかさね、現在のところ、1、2および3の一部に対する検討をおえた。1993年春までには4の保護上重要な植物の選定と結果の公表を予定しているが、ここでは1～3の研究の手順と、研究途上でえられた成果の一部をのべる。

保護上重要な植物候補のリストアップと 府県別分布現状の把握

1. 一次候補の選択

顕花植物については村田(1954～1992)の「近畿地方植物誌1～33」をもとに、村田が一次候補を選択した。ただし、近畿地方植物誌の単子葉類の未刊行部分は村田が候補をあげた。羊歯植物は瀬戸が一次候補を選択した。

一次候補は双子葉植物合弁花類440種類(亜・変・品・雑種をふくむ、以下おなじ)同、離弁花類578、単子葉植物450、羊歯植物187、計1655種類であった。

2. 府県別分布現状の把握

顕花植物の一次候補を栗林がリストにまとめ、府県別分布現状の調査票を作成した。調査票は近畿7府県(兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山・三重)をそれぞれ2～4のブロックに区分し、ブロックごとに種類ごとの産地数の現状と増減傾向、分布量の現状と増減傾向を記入する形式とした。増減傾向は最近20～30年間を対象としたが、情報のえられなかった種類や地域もあった。

研究会メンバーそれぞれに担当地域もしくは専門の分類群をわりあてたが、メンバー外から福原達人氏(ケシ科キケマン属)と藤田昇氏(ユリ科ギボウシ属)の協力をえた。以下に担当者と担当地域または担当分類群をあげる。

村田:京都・滋賀 瀬戸:大阪・奈良・和歌山・三重

黒崎:兵庫 小林:兵庫

梅原:大阪北部および低湿地性植物 角野:水生および湿地性植物

土屋:タデ科 永益:ハイノキ科

上記メンバーは個々の種類についての情報を提供した。

調査票記入時に一次候補に追加すべきと考えられる種類を各メンバーが追加した。追加候補数は合弁花類17、離弁花類27、単子葉類21で、結局一次候補として1721種類が検討されることになった。

3. 二次候補の選択と種類別の評価

1721種類の一次候補についての地域別産地数と分布量の情報をもちより、種類別に地域ごとの評価を検討した。評価は研究会の場での協議で、一次候補の一覧表に、種類ごと、地域ブロックごとに次の凡例にしたがって評価を記入することにした。

◎ とくに保護を要する ○ 保護を要する — 分布しないと考えられる
? 情報が無い E 絶滅 E? 絶滅? (現状不明)

上記の評価と同時に、えられた情報をもとにして二次候補を選択した。評価のための協議だけで、7回の研究会を要した結果、二次候補として合弁花類362、離弁花類532、単子葉類370、羊歯植物187、計1451種類である。

4. 三次候補の選択

1451種類の二次候補のリストをもとに、3回の研究会をもち、三次候補を選択した。この時点で候補種は保留もふくめて合弁花類192、離弁花類252、単子葉類295、羊歯植物165、計904種類にまでしぼられた。

絶滅情報がえられた種類の生育環境の類型化

顕花植物の一次候補についての評価で、1地域ブロックでも絶滅、もしくは絶滅?の情報がえられた種類は、合弁花類92、離弁花類82、単子葉類103、計277種類であった。こうした種類の生育環境に一定の傾向があれば、今後の保護計画に資することがおおいと考えられる。そこで、植物の生育環境を以下の13項目に分類し、上記の種群がおもにどのような環境に生育するかを検討することにした。なお、ここではあくまで近畿地方での生育環境を問題にした。

水域：湖沼、溜池、河川、水路など

貧養湿地：花こう岩地などに発達する貧栄養湿地

富養湿地：池沼や河辺の富栄養湿地

塩沼湿地：海岸や河口で海水の影響をうける湿地

海浜：海岸の砂浜

原野：はんらん原の草地

山地草原：山地の自然草原、または刈りとりや火入れのおこなわれていた草原

里草原：丘陵地の農地の周辺などで、つねに刈りとりのおこなわれていた小規模草地

耕地：水田・畑地

岩場：岩崖地

二次林：植林をふくむ

極相林：

集計の結果を表1に示す。

表1 近畿地方の1地域で絶滅、もしくは絶滅のうたがいのある植物の生育環境ごとの種類数。

環境	水域	貧湿	富湿	塩湿	海浜	原野	山草	里草	耕地	岩場	二林	極林
種類数	38	38	44	8	20	11	33	50	17	23	66	28

注：1種で複数の生育環境にまたがる種類、上記のカテゴリーにふくめにくい種類があるので、合計は277にならない。

表1をみると、水域や湿地の植物のおおくが危機に瀕しているのは全国的傾向に一致するが、里草原や二次林など、もともと人手がはいったというより、人工的に維持されていた環境に分布する植物が減っていることがあきらかになった。これは丘陵地の二次林や農地が住宅地、ゴルフ場などに転換されることの多い大都市周辺の開発事情を反映したものとといえるだろう。

また、山地草原性の種類の減少もいちじるしい。これは気候的な条件で、近畿地方にはもともとカヤ場がすくなかったことにくわえ、近年はカヤ場の利用がほとんどなくなったことも影響していると考えられる。

現在までの成果と今後の課題

現在までの研究で近畿地方における保護上重要な植物を三次候補までしほりこむとともに、どのような環境に生育する植物が危機に瀕しているかについて、ある程度の傾向をとらえることができた。

また、メンバーの現地調査によって、従来、調査がゆきとどかなかった地域や環境における分布情報がかかり集積された。たとえば三重県のミズスギナやホソバオグルマ、滋賀県の琵琶湖岸におけるオニナルコスゲは近畿初記録であるし、兵庫県ではオオマルバノホロシ、ホソバイヌタデなど、いままで未記録の原野性の植物があらたに採集された。

今後、最終的なリストをしほりこむとともに、どのようなかたちで公表するかを検討がのこされている。社会的な要請もおおきい研究ゆえに、早急に完成をめざしたい。

文 献

村田源、1954～1988、近畿地方植物誌1～30、兵庫生物、2(4-5)～9(4)、
村田源、1989～1992、近畿地方植物誌31～33、近畿植物同好会々誌、13～15。

近畿レッドデータブック研究会(ABC順)

藤井伸二

藤井俊夫

角野康郎

小林禮樹

栗林 実

黒崎史平
瀬戸 剛

村田 源
土屋和三

永益英敏
植田邦彦

布谷和夫
梅原 徹

岡本素治